

東海の女性たちの目覚め

—青鞆から参政権運動へ—

丸 山 豊

【抄録】 本文は中高生の歴史副教材としてまとめたものであり、研究論文ではない。21世紀は女性の時代といわれるがジェンダー教育からも近代女性の先駆的な役割を紹介する必要がある。男女を問わず、中高生が東海地域の女性の生き方に関心を持ち、総合学習も含めたテーマとして参考になればとまとめたものである。

【キーワード】 東海の青鞆社、上野葉子、上田きみ、市川房枝、ガントレット恒子 女性参政権

はじめに

—4人の女性たち—

東海で女性解放、「婦人参政権運動」の第一人者といえば市川房枝（愛知県尾西市出身1893～1981）となる。市川の運動を精神的にも組織的にも支え、発展させた女性にガントレット恒子（愛知県安城市出身1873～1953）がいる。ガントレット恒子は市川より二十歳も年上だった。彼女はキリスト教の立場から矯風会活動を通して女性について考え、特に第一次世界大戦後の1920（大正9）年スイスのジュネーブで開かれた欧州婦人参政権運動に参加し、平和は女性の参政権なくして考えられないと確信し市川房枝らと行動を共にしていった。ちなみに日本の名作曲家、山田耕筰はガントレット恒子の13歳年下の弟である。

市川とガントレットにつながる女性解放の道を歩んだ人物に美濃大垣出身の上野葉子（旧姓稲葉てつ 1886～1928）がいる。彼女は東海の青鞆社のメンバーで女性問題を正面から取り上げた。与謝野晶子の弟子の一人原田琴子（名古屋市出身）も雑誌『青鞆』で歌人としてだけでなく、小説、翻訳で女性問題に触れてはいるが、特筆すべき一人は上野葉子である。上野葉子は市川房枝のような華々しさはないが女性の自覚と解放を短い生涯地道に語り続けた。

雑誌「青鞆」が出版されたのは市川が十七歳の愛知県立師範学校時代であり、彼女は一冊だけ購入しているが関心を示していない。しかし、市川の生き方に青鞆の影響を否定することはできない。山田わか、平塚らいてうとの出会い、その後の1919（大正8）年新婦人協会設立の発起人の一人である奥むめおも上野葉子の教え子の一人であり青鞆とのかかわ

りからの出会い。

上野葉子と同郷・同期に上田きみ（1886～1971）がいる。上田は日本女子大学に平塚らいてうの一級下で入学した。雑誌『青鞆』第一号の表紙を飾った長沼智恵子（後の高村光太郎夫人）は同級であり上田の良き友人であった。また上田は青鞆のメンバーとして上野葉子の良き理解者でもあった。

上野葉子、上田きみ、市川房枝、ガントレット恒子の東海の女性たちは、女性の自覚、平等、参政権から平和と大きな流れの中で互いに結び合っている。ここではこの四人の女性を中心に足跡をたどっていきたい。

1. 東海の青鞆社、二人の女性

—上野葉子、上田きみ—

上野葉子（旧姓稲葉てつ）と上田きみの二人は1886（明治19）年共に現大垣市に生まれた。尋常小学校から大垣高等女学校まで同級であり、二人は家も近く幼い頃から近くの赤坂山や養老山へ遊びに出かけた幼なじみであった。女学校時代、上田きみは英語劇を演じたり、トルストイの人道主義について発表するという活発な女生徒であった。一方上野葉子は母の反対を押し切るほどの学問への情熱を持ち、女性の自立とを目指していた。後に上田きみは上野葉子を「自分の道を自分で切り開く強さを持った女性」と語っている。

この二人は青鞆が発刊されるとすぐ社員として名を連ね、同時に作品を投稿している。どのような共通点が存在したのだろうか。

1904（明治41）年上野葉子は東京女子高等師範学校、上田きみは日本女子大学に進学している。日露戦争勃発の年であった。女に学問は要らないと言われた時代。地方の大垣から高等教育を目指した二人

は互いに競い合う関係にあったのかもしれない。葉子は卒業後福井高等女学校で教鞭を執り、ここで奥むめおを教えた。教師時代の葉子は授業の中で女性の自覚を熱っぽく語ったといわれる。1911(明治44)年雑誌『青鞥』が発刊されると、社員として直ちに名を連ね、その年の12月青鞥第一巻第四号に評論「痛みと芸術と」を発表し「新しき女」の仲間入りをした。葉子が青鞥に参加していく必然性は幼い頃から母に反発してまでも学問への情熱を捨てなかった彼女の生き方の延長である。また、かつての同級生であり良き競争相手であった上田きみが日本女子大で新しい女性の道を求める胎動の中で成長していく姿を意識していたかもしれない。

一方上田きみは葉子と同年の1904年日本女子大学国文科に入学した。一級上に平塚明子(らいてう)同級に長沼智恵子(画家となり青鞥第一号の表紙絵を飾る。後の高村光太郎夫人)、増田雅子(後歌人として活躍)、一級下に山川登美子(後、与謝野鉄幹に師事、雑誌明星に短歌発表)という個性的で多彩な顔ぶれであった。短歌に関心を示し、また長沼智恵子とは教会に出かけたり、古本屋巡りをした仲でもあった。卒業後大阪毎日新聞の懸賞小説に応募し第一位に当選した『黒牡丹』は1908年より70回にわたり新聞小説として連載されたばかりか、京都の歌舞伎座で演劇として上演されるなど作家、脚本家として華々しいデビューであった。上田きみが青鞥に参加するのはごく自然である。日本女子大の卒業生を中心としたメンバーにとって新人女流作家上田きみの参加はと当然のことであった。こうして1911年『青鞥』第一巻第三号に小説「初秋」を発表している。

上野葉子は評論、上田きみは作家、歌人として活躍していくことになった。

『青鞥』「人形の家特集」の中の葉子ときみ

上野葉子と上田きみの二人が青鞥の社員となっていく1911(明治44)年は女性の新しい幕開けでもあった。この年、松井須磨子主役の「人形の家」(イプセン作)が文芸協会によって上演され、この演劇をきっかけに女性の生き方論争がはじまった。

上田きみはその時の心境をこう語っている。

「そのころ誕生した文芸協会の人形の家は婦人解放を示唆し、私たちの心を揺さぶらずにはおきませんでした。そしてきみは、翌年『青鞥』(第二巻第一号)に「人形の家を読む」を評論として寄稿した。

上野葉子も同号に「人形の家より女性問題へ」を掲載し「ノラの自覚は世界の女性の自覚」とし自立する女性の立場からノラを見つめている。ノラの家

出論争は、平塚らいてうも含めて展開された。これは葉子の普遍的女性の自覚と解放と結婚・家庭の在り方への問題提起であった。葉子の自立へのもがきは夫である海軍士官上野七夫の佐世保への転勤で現実となっていく。職業婦人として自立するためここでも高等女学校に勤めるかたわら、積極的に『青鞥』に投稿している。「女性の自立には生活の自立と精神の自立が必要」(進化上よりみたる男女)「男女の人格は対等」(超脱俗観)と主張し佐世保での葉子の存在が注目された。しかし、現実には職業と家庭の狭間に揺れていた。長男の妊娠、出産を契機に葉子は『青鞥』から離れていく。夫の転勤が多く、鎌倉、横浜、呉、京都、名古屋と転々とするが、驚いたことにその中であって小説「雑音の中より」を発表している。この作品でも職業をもつ女性が家事育児を背負わなければならない矛盾と良妻賢母を「哀れな不具な蓄音機」と批判した。

1928(昭和3)年、葉子は42歳の若さでなくなったが、彼女の問題提起は21世紀を迎える現在でも何も解決されていないばかりか、むしろ新鮮でさえある。葉子の若すぎる死に対し上田きみは次のような歌を詠んだ。

「尊くも生き給ひしよ 偽りの衣を脱ぎて 歩みし君は」

一方いち早く作家デビューを果たした上田きみは小説「旅」(青鞥第二巻第四号)を発表、また喜劇脚本「モルヒネと味噌」(青鞥第二巻第七号)を発表した後青鞥から離れていく。その後俳句の世界に入り「ホトトギス」に投稿するなど、俳人として人生を見つめた。戦後は句集を出したり、万葉集の講義をしたり1971(昭和46)年85歳の死まで文学の道を歩んだ。

大垣が生んだ近代女性史に名を残した二人である。

2. 女性参政権運動と市川房枝

市川房枝は日清戦争開始の前年1893(明治26)年に愛知県中島郡明地村(現尾西市)で農家の三男四女の三女として生まれた。学童期に日清戦争と日露戦争を体験した。高等小学校を卒業後の市川房枝の向学心と自立への意欲は目を見張るものがある。「女に生まれたのが因果」と愚痴をこぼす母の姿に「なぜ我慢しなくてはならないのか」といつも疑問に思っていたという。これが彼女の出発点だった。

彼女の行動力の豊かさを物語るものに、1911(明治45)年の愛知県立女子師範学校ストライキ事件がある。学校の良妻賢母主義に反発し実力行使に出た。リーダーとしての素質はこの時すでに備わっていたよ

うだ。前年には大逆事件がおり、韓国が植民地化されているが、自伝を読む限りどの程度関心を示したのかわからない。どちらかという当時の市川は「質実剛健」な生活に「一種の快さ」を感じていたようだ。

市川が女性差別を肌で感ずるのは、師範卒業後初めて訓導として手にした月給であった。男子教員との歴然とした格差があったからだ。

このような小学校教員時代(20~23歳)に明治が大正になり、大正の政変、シーメンス事件と民衆運動のうねりに彼女も啓蒙され、生徒たちに第一次世界大戦を教えている。どのように触れたかは明らかにされていない。一方で教員社会の古い体質から飛び出たくてうずうずしていた市川の姿もある。名古屋で開かれた講演会に積極的に参加し見聞を広めていた。新しいデモクラシーの空気を東京で思う存分吸いたいという欲求が頭をもたげていた。

雑誌『青鞥』と「新しい女」たちとの出会い

女性、社会問題からキリスト教まで関心を広げた市川は、雑誌『六合雑誌』に次のような投稿をした。『不徹底なる良妻賢母主義』(大正5年6月号)そこには『青鞥』について触れている。

「良妻賢母の反逆者?平塚氏一派に対しては口を極めて罵り排斥しているが静かに其の主張に耳を傾け、雑誌『青鞥』を繕いて過渡期にある我国婦人の心の中に如何なる思想が胚胎されているかに思いを潜めたものが幾人あろう。」と鋭い論戦を展開した。雑誌『青鞥』を市川は師範時代に一冊だけ購入しているが「余りおもしろいとは思わなかった」そうだ。また、新聞で「新しい女」なるものの記事を目にしたとき「驚いた」が「強い印象を受けてはいない」と語っている。

しかし、その後上京して平塚らいてうに接近していく。

胸を悪くしたためしばらく静養した後教員を辞め、「名古屋新聞」(現中日新聞)主筆、小林橘川の紹介で同紙初の婦人記者に転身し、女性団体の取材を行った。1918(大正7)年の夏、米騒動が起こった。市川自身米騒動を女性の政治的自覚と捉えていたかどうかは明らかでない。名古屋で「米騒動の大群衆に出会った」とだけ記している。

約一年勤めた名古屋新聞を辞め、上京し定職を捜しながら山田嘉吉氏の英語塾に通った。山田氏の妻わか氏は雑誌『青鞥』を講読する「新しい女」だった。彼女から平塚らいてうを紹介される。らいてうの印象を「美しい、静かな小さな声でゆっくり話す」人で、これが「新しい女」とよばれるご本人かと「眼をまるくした」そうだ。

山田わかとの出会いについて市川は、「おわかさん(山田わか)に会わなかったら今の私はなかった」と晩年テレビ番組で語っている。

名古屋新聞の講演会に平塚らいてう、山田わか氏らを招くことになり、小林橘川の依頼で市川が奔走し成功させた。その後も平塚らいてうと共に繊維工場の女性労働者の実態調査のため岡崎方面に出向いたり、東京では東京モスリンに同行している。

この年大日本労働総同盟友愛会の書記になり、三カ月の短い期間ではあったが婦人労働者の生活・労働条件の問題に取り組んだ。

新婦人協会の設立から参政権獲得運動へ

ロシア革命につづく第一次世界大戦後の各民族、女性の自立の動きの波が世界をおおった。いわゆる「大正デモクラシー」の大きな盛り上がりの時期に、平塚らいてうらと共に1919(大正9)年新婦人協会を設立し、女性の人権の立場から政治活動の権利の道を切り拓く運動に入った。らいてうがこの時期の市川をどう評価していたかは興味深いところである。新婦人協会は平塚らいてう、奥むめお、市川の三人が発起人だったが、山田わかは少し距離をおいて演説会などに協力している。

新婦人協会の活動目標は、「治安警察法第五条の改正」と「花柳病男子の結婚禁止」の二つであった。つまり、女性の政治活動の自由と婚姻への女性自らの意志表明であり、イデオロギーを超えて全ての女性が参加できるものであった。

治安警察法第五条とは次のような内容であった。
第五条

1. 左ニ掲グル者ハ政事上ノ結社ニ加入スルコトヲ得ス
五. 女子
2. 女子及ビ未成年ハ公衆ノ会同スル政談集会ニ会同シ若シクハ其ノ発起人タルコトヲ得ス

この条項改正は、婦人参政権獲得のたまたかの重要な目標であり、その前提になるものであった。この目標にもっとも早く主体的に取り組んだのが福田(旧姓景山)英子の主催する半月刊誌『世界婦人』であった。福田は堺為子、幸徳千代子らとともに治安警察法改正運動を起こしたが結局貴族院で否決されている。平民社の運動に加わった遠藤清子は福田の改正運動を受け継いだ。遠藤は『青鞥』に参加、新婦人協会に期待し1920(大正9)年講演を行っている。この流れの中で「新婦人協会」はその門戸を大きく広げていくことができたのである。青鞥を接点として社会主義の立場からの女性運動がつながるのである。

しかし、当時母性保護をめぐる論争に力点が移り、山田わか「良妻賢母」「母権主義」の立場を強めていたし、平塚らいてうは第二子出産後「母性を持つ女性が社会をつくり変える主体」になるべきだとし、彼女はこの時期『『青鞥』の運動の末期において私たちが突き当たった壁』をこの点から打ち破る必要を主張した。これに対し「良妻賢母の前に人としての男女平等の確立」の重要性を認識していた市川は平塚らいてうとの距離を感じはじめていた。この結果一年半の活動の中で平塚と市川の溝が生じ市川は1921（大正10）年の新婦人総会で理事を辞職して読売新聞の特派員として渡米してしまった。

世界を眺めれば女性参政権は1883年世界で初めてニュージーランドで実現し、遅れてドイツが1919年に、翌年にはアメリカで獲得されている。市川の渡米はアメリカの女性が参政権を獲得した翌年であった。

市川が渡米している間、平塚らいてうも病気のため新婦人協会から退いている。しかし、1922（大正11）年3月、治安警察法第五条第二項が改正され（第一項の五は残された）、女性の政治集会参加の道がひらかれた。後に残った奥むめおらの努力の結果だった。しかし女性の政治参加第一歩の記念すべきニュースを市川はアメリカで聞いた。

社会主義の立場から赤欄会が組織されたのは1921（大正10）年である。山川菊枝、伊藤野枝、堺真柄らが中心となった。山川は新婦人協会を「平塚明」という「個人を中心とし成立」した団体で「第二の青鞥社」と批判した。

婦人参政権獲得期成同盟

婦人参政権運動にはもう一つの大きな力が動いていた。日本キリスト教婦人矯風会の活動である。ここで活躍していた久布白落實とガントレット恒子が中心となり1923（大正12）年いち早く「日本婦人参政権協会」を結成した。この時市川は渡米中でありワシントンで催された世界社会事業大会に出席しアリス・ポール女史と会い、日本での婦人参政権運動への取り組みの決意を新たにしている。

翌年帰国した市川は、新設されたILOの職員になったが各地で女性解放運動が芽生えている事実を目の当たりにした。新婦人協会の後を継いだ婦人連盟などで結成された婦人参政同盟、東京連合婦人会の金子しげりなどからも市川に運動への参加要請があった。婦人参政権運動の大同団結の必要を市川は感じていた。この中核となったのがキリスト教婦人矯風会の「日本婦人参政権協会」である。参政権運動が「婦人参政権獲得期成同盟会」として結束し市

川も事実上のリーダーとなった。総務理事はキリスト教矯風会の久布白落實だった。実はガントレット恒子が久布白落實を推した。ガントレットは国際結婚のため、英国籍になっており、自らは代表を辞退した。久布白落實はその後華々しく活動を展開するが「久布白の活躍はガントレット恒子の存在なくしてはありえなかった」（『七十七年の想ひで』高橋喜久江の解説）とされる。また、市川もガントレット恒子の存在の大きさを認めている。このようにキリスト教矯風会の活動は立場を越えた女性運動の大同団結的役割を果たしていった。

創立当初の会員には、社会主義の立場から山川菊江、堺真柄も名を連ねていた。前年の関東大震災直後、大杉栄・伊藤野枝らが虐殺されたこともあってか社会主義者も含めた幅広いものになっている。

1925（大正14）年男子の普通選挙法案が治安維持法とともに成立した。市川らは普選を婦選と置き換えて「婦選獲得同盟」と改称しより幅の広い運動に進めていった。

1928（昭和3）年男子普通選挙による初めての結果がでた。無産政党から八名の当選者を出したことが婦選獲得運動に弾みをつけた。婦選獲得共同委員会への結集である。そこには無産政党を支持する多くの婦人団体も参加している。

この時期、市川房枝はとにかく前へ前へと進んでいる。婦選獲得のために全方位にわたって呼びかけ、共同していこうとする凄じいほどのエネルギーである。草の根の世論を掘り起こし結集していく。こうした努力の末、1930（昭和5）年全日本婦選大会が開催された。この大会で「婦選の歌」が発表された。作詞は与謝野晶子、作曲は山田耕筰である。山田の実姉に当たるガントレット恒子が市川らを支えていたことがうかがえる。婦選獲得の時はまさに熟していた。

戦争への協力と苦しみ、そして戦後ついに女性参政権獲得

1930（昭和5）年婦選三案が国会に上程されようとしていた。参政権、公民権、結社権である。しかし、よく1931年9月、満州事変がおこされて女性参政権の道はほど遠いものになっていく。十五年戦争は女性解放の歴史をも歪めていった。全日本婦選大会は運動の方向を女性参政権獲得から一步退き政治浄化、母子保護問題に変えさせるを得なかった。市川も反ファシズム、反軍国主義を降ろし、女性の政治参加の現実的な道を探り始めていく。その結果、市川は大政翼賛会調査委員、大日本言論報国会理事を引き受けるなどなど毅然とした態度を示せないま

ま、戦争協力に巻き込まれていった。

市川はそのときの心境を次のように振り返る。

「当時社会の表面にたち、婦人運動を行っていないながら、毎日の新聞を見て、オロオロするだけでこれを止め得ず、消極的にせよこれに協力した責任を痛感する。」(『市川房枝自伝』)

終戦の詔勅を悔し涙で聞いた市川であったが、婦人解放の情熱は以前に増して高まり1945年8月25日には「戦後対策婦人委員会」を組織し、東久邇宮内閣に婦人参政権実現をせまった。代わった幣原内閣は其の年の10月10日婦人参政権を閣議決定した。マッカーサーによる五大改革指令がだされたのはその翌日であった。女性参政権はアメリカから与えられたものではなく、多くの女性たちのねばり強い歴史の成果と評価すべきものである。

3. 国際人として女性運動を支えたガントレット恒子

ガントレット恒子(旧姓山田恒)を知らなくても山田耕作を知らない人はいない。二人は13歳離れた姉弟であった。幼いころ父を失い、一時母の実家に預けられた耕作にとって恒子は家計を支える父親代わりの存在であった。耕作が音楽家の道を志したのも姉恒子とその夫ガントレットの影響が大きい。1873(明治6年)三河碧海郡箕輪村(現安城市)に生まれたガントレット恒子は日本近代女性史の中で大きな足跡を残した。一つは日本で初めての「正式な国際結婚第一号」としてである。当時外国人の妻になることを「ラシャメン」と白眼視した時代母の反対を押し切り、英語教師として来日していたイギリス人エドワード・ガントレットと結婚する。1889(明治31)年恒子26歳の時であった。小学校はミッションスクールに通い、そこで矢嶋楯子の指導を受けたという幼い頃からキリスト教の環境に育ったからである。この結婚にあたり、すでに日本基督教矯風会で活動し、また英語教師として自立していた恒子は夫ガントレットに次の条件を出している。「婦人解放のために働きたい」「そのためには経済的自立する」「活動の時間的保障」。恒子とガントレットの近代的結婚観、夫婦観、女性観がうかがわれる話だ。

二つ目は「婦人解放」のために何をなすべきか、を問い「平和」と「女性参政権」を目指し一貫して歩み続けてきたことだ。ガントレット恒子の活動の原点となるもの、それは第一次世界大戦だった。1920(大正9)年スイスのジュネーブで開催された万国婦人参政権協会大会に出席した時に大きな衝撃を受けた。ドイツ代表が「私どもが四年前に参政権を持っていたらこの戦争は防ぎ得られたのではないだろうか」の発言で

あった。

帰国後、時に恒子44歳、六人の子を育てた母親としてその強さが運動に発揮されていく。

様々の立場の平和運動、女性参政権運動をガントレット恒子はキリスト者の立場から大同団結させていった。また、彼女の英語力は国際的な連帯への活動を広げた。

市川房枝、久布白落實の活躍もガントレット恒子の存在なくしては難しかったといわれる。

弟山田耕作と恒子との関わりはあまり知られていない。耕作は1886(明治19)年東京で生まれ10歳の時父親を失い母方の実家に引き取られ、15歳の時にガントレット夫妻の岡山で共に生活を始めている。夫妻共に教職にあった。義兄ガントレットの弾くパイプオルガンを聴く毎日を過ごした。彼の音楽の才能はこの中で芽生えていく。

1920(大正9)年ジュネーブの大会に参加し疲れた身体をホテルで休める恒子は望郷の念にかられ思わず口ずさんだのが、弟耕作の作曲した童謡「トントントロリコ」だった。弟想いの一面がうかがわれる。

また、市川房枝らとすすめた1929(昭和4)年の婦選獲得期成同盟創立五周年に発表された『婦選の歌』の作詞は与謝野晶子、作曲は山田耕作であった。ガントレット恒子の活動の幅を示すものである。

しかし、1931(昭和6)年の満州事変に端を発した十五年戦争は姉と弟を岐路に立たせた。この戦争で恒子は英国籍であるが故にスパイ容疑、嫌がらせを受けたばかりか、日常生活でも特高の監視下に置かれるなど筆舌に尽くしがたい苦しみがあったようだ。ついに夫妻は英国籍を捨てて、日本人に戻ることを決意した。岸登恒となる。屈辱的なことであった

一方耕作はこの時期「満州国国歌」を作曲するなど、国策のレールに載せられていった。この歴史の皮肉な流れの中、恒子はどんな思いで弟を見つめていたのだろうか。

戦後、恒子は戦時下の自分をこう批判している。

「約25年間近く世界平和を叫んできた自分がつひに一言も戦争反対の声を挙げ得なかった」ことを「痛恨の感情」とし「自分の非力」を詫びている。しかし、恒子は詫びるだけではなくその反省を次の行動にうつしている。1951(昭和26)年サンフランシスコ講和会議対日平和条約締結について、恒子は全面講和実施と再軍備反対を唱え野上弥生子、平塚らいてうらと共に立ち上がった。

1953(昭和28)年80歳でなくまでキリスト教を支えとしたヒューマニズムに生きた人であった。国際人として「平和」と「女性の人権」をしっかりと支え続けた女性であった。

参考文献

- 上野七夫編『葉子全集』(1928年)
復刻版『叢書「青鞆」の女たち』(1986年)
大垣市文教協会編『郷土大垣の輝く人々』(1995年)「婦人の自覚と解放の道を求め続けた上野葉子」
「青鞆に参加し文学に情熱を傾けた上田君子」
井手文子『青鞆の女たち』(海燕書房1975)
スイंक推進協議会編『西濃ゆかりの女性群像』(1989年)
井手文子『青鞆解説総目次索引』(不二出版1981)
市川房枝『市川房枝自伝前編』(新宿書房1974)
市川房枝記念出版部編『市川房枝と婦人参政権運動』(1992)
歴史評論編集部『近代日本女性史への証言』(ドメス出版1979)
市川ミサオ『市川房枝のおもいで話』(NHK出版1992)
森哲郎『まんが・市川房枝物語』(明石書店1989)
秦達之「市川房枝は「名古屋新聞」をなぜ一年で辞めたか」『東海近代史研究第十九号』(1997)
ガントレット恒『七十七年の想ひで』(植村書店1949)
高橋喜久江(同復刻版解説 大空社一九八九)
稲垣恒夫・岡田洋司「ガントレット恒。山田耕筰の家系について」『かりや』(刈谷市郷土文化研究会)
森脇佐喜子『山田耕筰さんあなたたちに戦争責任はないのですか』(梨の木舎1994)
山田耕筰『自伝若き日の狂詩曲』(中公文庫1996)
出久根達郎「母なるものの姉」『自伝若き日の狂詩曲』の解説